

2021年12月26日（日）「尾根の中央を行け」

あなたはただ、大いに強く、雄々しくありなさい。私の僕モーセがあなたに命じた律法をすべて守り行い、そこから右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功を収める。（ヨシュア 1:7）

あなたがたは、あなたがたの神、主が命じられたとおりに、守り行わなければならない。右にも左にもそれではならない。あなたがたの神、主があなたがたに命じられた道をひたすら歩みなさい。そうすれば、あなたがたは生き、幸せになり、あなたがたが所有する地で長く生きることが出来る。（申命 5:32-33）

彼らがあなたに教える指示のとおり、また彼らが告げる判決に基づいて、あなたは行わなければならない。彼らが告げる言葉から、右にも左にもそれではならない。（申命 17:11, 20）

また、王の心が同胞に対して高ぶることなく、この戒めから右にも左にもそれがないためである。そうすれば王もその子孫も、イスラエルの中で王位を長く保つことができる。（申命 17:20）

あなたは、今日私が命じるすべての言葉から右にも左にもそれではならず、他の神々に従って、これに仕えてはならない。（申命 28:14）

今日は今年最後の主日につき、節目のテーマにしております『狭い道』（D.ワング）という本から語らせていただきます。しつこいようではありますが、信仰者として道を踏み外すことのないように、心を引き締めてこの年を締めくくりたいと思います。

今日は第1章の「尾根」という箇所を扱います。ざっくり申しますと、信仰の道を登山道になぞらえて見るときに、山岳の尾根をちゃんと歩いているかどうかを常に意識していなければならないということです。私自身はあまり登山の経験がないのですが、あるプロの登山家の文章に、このようなことが書かれていたのを覚えています。山に登る前に必ずやらなくてはならないことは、その山の地形をしっかりと頭に入れておくということである。そして、万が一登山道から外れてしまった際に、道だけを頼りにするのではなく、間違えた所を把握できるように、また戻るための体力や時間も想定して計画を立てておかなくてはならないということです。山の地形が頭に入っていれば、自分がどこにいるのかが分かるそうです。重要なのは、尾根に乗っかっているかどうか。尾根とは、等高線の出っ張った所をつないだもので、その上を歩いていれば、周りの景色を見

て、自分が正しい道にいるかどうかを確認できるそうです。尾根に乗っかっているかどうかは、左右に自分より高い場所があるかどうかで分かります。信仰の旅路もまた、これと似ているというのです。

①正しい教えに立ち続ける

まず、信仰者一人ひとりに対して神様が抱いている関心事について考えてみましょう。それは、もちろん信仰に立って生きることであり、その信仰の道を最後まで歩み抜くことです。信仰の道は尾根のように狭く、常に山の最も見晴らしの良い場所を歩いていきますから、左右は転落する危険性があります。この「転落」とは、いろいろな捉え方ができると思いますが、第一に間違った教えに傾倒していくということが挙げられるでしょう。同じキリスト教を名乗るものでも、内実は全く異なるものがたくさんあります。所謂「異端」はそこかしこに蔓延っていますし、福音を語っているようでそうでないものもあります。Facebook で時々友達申請が来るものの中にも、「全能神」のような異端グループが稀に含まれているので、注意が必要です。キリスト教ならば何でも受け入れてよいかというとそうではなく、そこで語られていることがどういう立場から出ているものであるかを注意深く見極めなければなりません。真理を見分ける嗅覚は、常に正しいものを見ていることによって養われます。文書の中で使われているちょっとした表現を見るだけで「あれ？」とを感じるようになるのです。ですから、教理を体系的学ぶことは重要であり、同時に正統的な立場の中に含まれている複数の考え方を把握しておくこと、自分の所属教会ではどれを採用しているのかを理解しておくことも大切です。また、「異端」と呼ばれる教えも、乗っけから否定するのではなく、我々の信条とどこが同じでどこが違うのかを理解し、なぜ自分はその考え方を受け入れることができないのかを説明できるようにしていく必要があるでしょう。先入観だけで相手を裁くのではなく、信教の自由に基づいて相手を理解する姿勢を失ってはいけないと思います。

「もし私たちが何が間違いかを知らないならば、真理をどのように知り、どのように擁護できるだろうか。」(p.23)

著者は、次のような例えも語っています。

「あるお医者さんが毒の影響で苦しんでいる患者の治療の仕方を知るために、あらゆる種類の毒を扱い研究する必要があることを教えてくださいました。」(p.23)

このことから教えられるでしょう。私たちは「これは毒だから」と触ることすらしないで、ひたすら避ける生き方をしているかもしれません。しかし、毒を調べることによって、何がどう人間を害するのか、信条においてはどのように信仰をダメにするのか

を、時として学ぶ必要があるのです。しかし、その前提にあるのはまず正しいものを知っているということであり、批評的な目で様々な教えを判断できるようになるということです。

②裁かず

次に、尾根から転落しないための第二の要素になりますが、これは第一の要素とややつながりがあります。それは、正しさを追求するあまり、人を裁く者とならないようにということです。主イエスがとりわけ警告されたのは、誰もが認める悪人ではなく、立派な宗教指導者たちでした。

「彼らはもう一方の側からできるだけ遠ざかっていましたが、その側とは、放蕩息子、エリコに行く途中で傷つけられた男、あるいは、『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください』と泣き叫んだ取税人のたとえ話などで象徴されています。」(p.25)

怖いのは、私たちが知らずして信仰の弱い人々を裁いている状態です。「この人はこうだからダメだ、あの人はああだからダメだ」ということを考え、口に始めていたとしたら、注意が必要でしょう。自分の心から「愛」が喪失していたとしたら、それは危険な状態です。著者はこのことがよく分かるように、放蕩息子の譬に出てくる兄を例に出しています。

「イエスが放蕩息子の話をされたとき、宗教指導者たちと彼らが見下し避けていた人々の両方がそこにいました。父親のお金をもらい、家を出て、お金を浪費した弟が失われた者であったことは、聴衆には明白でした。そこまで明白でないにしろ、イエスの物語の中で同等に重要であったのは、兄も失われていたという事実です。兄は家に残り、孝行息子として仕えていましたが、弟の帰宅をお祝いすることへの招きは拒絶しました。たとえ話の中で、弟は父親を『おとうさん』と三度呼んでいます。兄はそのようには一度も父親に語りかけていません。」(p.25)

放蕩息子の譬は、「慈愛の父」「放蕩息子」「忠実なる兄」の三者がそれぞれ主人公と言ってもよいほど重要な役割を果たしています。しかし、文脈で読むと、この譬話の中心は、実は兄であることが分かります。いえ、この譬話を主イエスが語られた相手がユダヤの律法の教師たちであったということから、主イエスが彼らこそ「兄」に相当することを悟らせようとしていた意図が読み取れるのです。聖くあろうとするあまり、罪人に対する憐れみの心を閉ざし、救いに導くこともせず、自らの義に酔い、神の御前における自分の罪を見失った状態を、主は何よりも嫌われました。

③ 墮落せず

尾根から転落する第三の危険性は、第二の反対の崖にあります。それは、罪の内を歩み続けることです。先の放蕩息子の譬において、兄に焦点が当てられていたからといって、弟に問題がないわけではありません。弟が父親に対して犯した罪は、弁解の余地なきものでした。散財というのは、罪の現実と似通った面があり、それは積もり積もって雪だるま式に膨らんでいく傾向があります。

人はそれぞれ、自分の欲望に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。そして、欲望がはらんで罪を産み、罪が熟して死を生みます。(ヤコブ 1:14-15)

人が罪を犯す場所は、それぞれの弱い部分においてです。言葉において罪を犯しやすい人があれば、暴力的な行動で罪を犯しやすい人もいます。異性との関係において罪を犯しやすい人があれば、金銭面で罪を犯しやすい人もいます。最初は小さなほころびだったものが、それを放置しておくでだんだんと傷が大きくなり、当初は罪意識を覚えていたものがやがて何も感じなくなり、「罪が熟して死を生む」という恐ろしい状態に陥る危険性があります。人間には誰にでもその傾向があり、最初はどれも小さなところから始まったはずなのです。「罪に留まり続ける」ことを避けなくてはなりません。聖霊が心に語りかけてくる小さな声を無視し続けてはなりません。気づけば神との交わりがまったくなくなった生活をしていたというのは、怖いことです。

以上、尾根から転落する三つの危険性について語ってまいりましたが、著者の言葉を今一度引用したいと思います。

「使徒パウロは、同様な問題に直面しました。彼は、一方では律法主義者と闘い、もう一方では放縦者たちと戦わなければならなかったのです。律法主義者たちは律法を守り、それこそが救いに至る唯一の道であると主張しました。放縦者たちは、自分たちは救われており、律法から解放されたので、思いどおりに生きることができると主張しました。『律法遵守者』と『無律法主義者』もその両者ともが、それぞれの側に尾根から転がり落ちてしまっていたのです。」

「律法遵守の側に対して、パウロは宣言しています。『それでは、私たちの誇りとはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行いの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。』(ローマ 3:27-28)」

「無律法の側に対しては、パウロは警告を与えています。『それではどうなのでしょう。

私たちは、律法の下にではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。……罪から解放されて、義の奴隷となったのです。』(ローマ 6:15,18)

以上、正しい教えに立ち続けること、自己義認に陥らないこと、罪の内に留まらないことという三つのポイントで語ってまいりました。信仰の旅路においては、危ういところを誰もが通り得ます。それゆえに、これらのことを誰もが心に留めて歩んでいる必要があるのです。自分の弱いところを知ることも重要でしょう。そして、崖に片足を取られていることに気づいたら、尾根の真ん中に戻るようにしたい。

「ハイキングの中で、山の両側が見える尾根づたいに歩く所がありました。その道は狭く、どちら側にも転げ落ちないように、ものすごく気をつけなければなりません。安全のためには、小道の中央を行かなければなりません。」(p.24)

しかし、信仰者にはどんな時にも希望があります。尾根の中央を歩くとはい自分の力ですることではない。主イエスの背中をしっかりと見て歩いていけば、そこが中央なのです。主イエスとロープでしっかりとつながっていることが大切です。私たちは一人で山道を歩いているではありません。登山家たちがキリマンジェロを登るときにするように、複数人が一つのロープでつながり、足を踏み外しそうになった人を補助します。万が一、私たちが罪の道に足を踏み出したならば、仲間がそれを見つけ出すこともあるでしょう。そして、主イエスは信仰を持っている者が崖から落ちることがないように、常に聖霊によって守ってくださっています。私たちの心から御霊の火を消すことがないように、むしろ燃え続けていることができるように、祈りつつ歩んでまいりたいと思います。

【祈り】

時の支配者なる神よ。2021 年もあなたの御手の中で歩ませてくださったことを、感謝いたします。私たちの信仰の旅路は登山に例えられるように、そこには様々な危険が待ち受けています。外的な要因だけでなく、内的な要因もたくさんあります。どんな時にも、道しるべである主イエスの背中を見続けていることができますように。そして、聖徒が互いに支え合う教会であることができますように。来る 2022 年も主の御手に身を委ねて歩んでまいります。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

常に正しい真理、歪みなき福音の理解に立たせ給う、父なる神の愛、

自己義認の罫より守り、神の御前にへりくだった歩みへと導き給う、主イエス・キリストの恵み、

自らの弱さに気づかせ、あらゆる罪より回避させ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。